

ナイジェリアの新宗教

十字架と星の同胞団

落合雄彦



今日の新宗教運動の隆盛は、けっして現代日本社会に特殊な宗教現象などではない。例えばキリスト教といった既成宗教が、その教理と組織における硬直性のゆえに、現代人の苦悩に十分に対応することができず、主にヨーロッパにおいて衰退の危機に直面しつつあるのに対して、新宗教は、そうした現代人の抱えるさまざまな問題により明確な解決策を提供することによって、宗教としての「実力」を示し、北米、アジア、ラテンアメリカ、そしてアフリカといった地域で急速な自己増殖を遂げてきているのである。

筆者は、1995年8月下旬の数日間、ナイジェリア南東部クロスリバー州の州都カラバーに本部を置く十字架と星の同胞団（The Brotherhood of the Cross and Star：以下、同胞団と略す）というキリスト教系新宗教教団の参与観察を行なった。本稿は、そのささやかな現地報告である。

1 新宗教の原風景

まず、同胞団の説明に入る前に、同教団が形成されてきた背景にある、ナイジェリアのキリスト教系新宗教運動の史的展開についてここで簡単に触れておきたい。

ナイジェリアのキリスト教系新宗教は、歴史的にみると、これまで大きく三つの潮流となって生成、発展してきた。

まず第1の潮流は、従来広く独立教会と総称されてきたアフリカ独自のキリスト教運動のうち、特にエチオピア教会と呼称されている一連の宗派群である。エチオピア教会は、教会の運営や組織における白人宣教師の支配に不満を抱き、母体である欧米ミッション系教会から分離・独立した教

写真：同胞団の信者たち。多くのアラドゥラ教会と同様、信者たちは白衣を着用し、特に女性は頭巾で頭部を覆うことが義務づけられている。

会であり、ナイジェリアにおいては主に19世紀末から20世紀初頭にかけて南部地域を中心に創設された。こうしたエチオピアタイプの独立教会では、ナイジェリアの伝統的ダンス、音楽、衣装が礼拝に導入され、またときには一夫多妻制といった土着の慣習が受容されるといったことはあっても、教義自体はミッション系教会とほとんどかわらないことが多く、総じてそのアフリカ化の度合いはあまり高くはなかった。

これに対して、ナイジェリア南西部で特にアラドゥラ教会（アラドゥラとはヨルバ語で「祈りの人」の意）と呼ばれてきた第2の潮流に属する独立教会は、憑依、熱狂的な祈禱、異言（聖霊に満たされて意味不明な言葉を話すこと）、悪霊祓い、信仰治療などを共通の特徴とする、アフリカ化されたキリスト教の代表例である。アラドゥラタイプの独立教会は、エチオピア教会よりもやや遅れて1920年代頃からヨルバ社会のなかに形成され始め、やがてナイジェリア人移民コミュニティを拠点に西アフリカ各地へと教勢を拡大、今日では欧米にまで支部教会を擁する教団も少なくない。アラドゥラ教会の代表例としては、ケルビム・セラフィム（1925年）、主の教会（アラドゥラ、25年）、天上のキリスト教会（47年）などが挙げられる（年度は創設年）。

こうした独立教会の二つの潮流に加え、1970年代以降、それまでみられなかったカリスマ運動がナイジェリア各地にみられるようになった。この第3の波とも呼ぶべき運動は、欧米において60年代以降生じたカリスマ運動が波及してきたものであり、ナイジェリアに20年代以降みられたペンテコステ派教会（ペンテコステ派とは、もともと20世紀初頭、アメリカ西海岸で始まったリバイバル運動のひとつであり、聖霊による洗礼や異言などを強調するグループ）といわば合流することによって、ナイジェ

リア社会で急成長を遂げてきた。このペンテコステ＝カリスマ教会は、当初、敬虔なクリスチャン学生や大学教員によってキャンパス内に組織された聖書研究会やキリスト者学生会として始まり、やがて教会へと発展、印刷物やマスメディアを用いた大々的な宣教活動によって教勢を拡大してきた。こうしたペンテコステ＝カリスマ教会の代表例としては、73年ラゴス大学の数学講師によって創設されたディーパー・クリスチャン・ライフ・ミニストリーが挙げられる。

さて、ナイジェリアにおけるキリスト教系新宗教の史的展開を、エチオピア教会、アラドゥラ教会、そしてペンテコステ＝カリスマ教会の三つの潮流に分けて紹介してきたが、必ずしもすべての新宗教運動がこうした範疇のいずれかに分類されるというわけではない。そして、本稿で取り上げる同胞団は、この3類型のいずれにも属さない、あるいはあえていえば、アラドゥラ教会とペンテコステ＝カリスマ教会の双方の特徴を部分的に兼ね備えた新宗教教団といえよう。

2 教祖の神性：“Father is not God but OOO”

同胞団は、1958年、オルンバ・オルンバ・オブ（Olumba Olumba Obu）という教祖によってカラバーの地に創設された。オブは、18年にカラバーの北にあるビアクパンという小さな村に生まれ、5歳頃に死者を復活させるという最初の奇蹟を行なったといわれている。その後、ほとんど正規の学校教育を受けずに18歳頃から服地を売る商人として自活するようになり、26歳にしてキリスト教の布教活動に専心することを決意し、40歳頃に同胞団を正式に発足させた。創設当時、同胞団のメンバーは、オブによって病気から奇蹟的に癒された

者を中心にわずか60人ほどであったが、同胞団はその後の40年間に急速に拡大、いまやナイジェリア国内はもちろんのこと、西アフリカ、欧米諸国に多数の礼拝堂(同胞団内では教会という用語を用いない)を有し、その信者数は、筆者が教団幹部から直接聞いた、明らかに誇張されているであろう数字で全世界に1000万人、またある学術書によれば200万人程度と推定されている(Friday M. Mbon, *Brotherhood of the Cross and Star : A New Religious Movement in Nigeria*, Frankfurt : Peter Long, 1992)。

同胞団の興味深い点のひとつは、教団がかなり特異な、あるいは既成キリスト教会から見れば明らかに異端的な教義体系を有しているところにある。その最たる事例が教祖の神性である。同胞団本部の礼拝堂で教祖を直接見た筆者の眼には、彼は、その聖衣である真っ赤なローブさえ着用していなければ、ナイジェリアのどの農村にでもいるようなごく普通の老人にしか映らなかったが、同胞団内では、教祖オブは神の8回目の化身として信者に崇拝されているのである。

ところで、日本の新宗教ではしばしば語呂合せというテクニックが用いられる。例えば、ある人が肺の病気に罹り、癒されたいと願って新宗教の霊能者のもとに行くと、「あなたが肺病に罹った原因は、あなたが小さい頃、ご両親のおっしゃることを『はい』『はい』と素直に聞かなかったからですよ」といった、霊能者の「診断」が下されるのである。そこでは、身体の部分の「肺」と返事としての「はい」の語呂合せが、病因の霊的な解説のために用いられている。こうした語呂合せはかなり素朴な技法ではあるが、しばしばそれなりの説得力をもって人々に受け入れられるものであり、筆者が話したある同胞団の男性信者もまた、こうした語呂合せのテクニックを用いつつ教祖の神性について語ってくれた。

彼は、「オブは神ですか」という私の質問に対して、「お父様(教祖のこと)は神ではないが、“OOO”なのだ」と言った。“OOO”というのは、いうまでもなく教祖オルンバ・オルンバ・オブのイニシャルであるが、彼の説明によると、それは同時に教祖がOmnipresence(遍在)、Omniscience(全知)、

ピアクパンの小川。早朝ここで沐浴することによって、癒しの奇蹟が起ると信じられている。日中は、住民の洗い場として用いられている。



Omnipotence（全能）であることをも象徴しているのだという。つまりオブは、教団内では遍在全知全能であると信じられており、その意味で紛れもなく神なのである。ただし、教団においては、神（God）という言葉自体が実質的にその本来の意味を喪失し、それに代わる絶対者の新しい名称として“OOO”，つまりオルンバ・オルンバ・オブが用いられているのである。

3 教団の諸相：“The Brotherhood is not a church but the New Kingdom of God”

教団は、事前の連絡もなく同胞団を突然訪問した筆者に対して、本部内にあるインターナショナルゲストハウスへの無料の宿泊、諸集会への自由な参加、そして教団の教義や活動に関する幹部との長時間にわたるインタビューを許可するなど実に寛大な対応を示してくれた（ただし、教祖やその家族との単独会見は許されなかった）。

教団本部には、広い敷地内に、ゲストハウスのほか礼拝堂、小学校、書店、管理棟、教祖の私邸などの建物が立ち並んでいた。そして、同胞団のメンバーであることを証しする白いローブを身に着けた多数の老若男女の信者が、昼夜を分かたず、「平安を（Peace）！」という同胞団の挨拶をお互いに交わしながら敷地内を頻繁に往来していた。

筆者が同胞団を訪問した8月は、丁度ペンテコステ集会の時期であった。同胞団は、4月、8月、12月の年3回、各1カ月間程、ペンテコステ集会という集いを開催する。この集いには、世界各地から信者が集まり、毎朝5時の祈禱会に始まって、礼拝、讃美集会、会議、聖書研究などの多様な集会が翌朝2～4時頃まで断続的に、しかも連日行なわれるのである。そして、1日に数回、教祖が礼

拝堂に姿を表わし、会衆に説教をするのであった。

筆者は深夜、ゲストハウスの自室のベッドの中にいて、鳴り止むことのない外部からの讃美の歌声を聞きながら、「いったい彼らはいつ寝ているのだろうか」と疑問に思ったものである。ほぼ24時間、しかも連日続けられるこうした諸集会のために（あるいは個人的な断食のゆえに）、信者のなかには、昼間の礼拝中にも関わらず礼拝堂のベンチやその下で横になって眠り込んでしまう者も数多く、外部者である筆者には、信者たちがどこか通常の時間の感覚を喪失してしまっているかのよう感じられてならなかった。

このほか筆者は、教祖の生誕地ビアクパンへの「巡礼」の旅も行なった。教団側に教祖の生地を訪れたいとの意志を伝えると、教団側が車や同行者の手配をしてくれた。折しも雨季で道路事情が悪く、カラバーからビアクパンへの「巡礼」には往復丸一日を費やさなければならなかった。筆者はしばしば信者から、「同胞団は教会ではなく、神の新しい王国なのだ」というお決まりのフレーズを幾度となく聞かされたが、同胞団によって「新しいエルサレム」と呼称されるこのビアクパンは、神の新しい王国の、来るべき聖都として、信者の巡礼の対象とされているのであった。現在同胞団は、近い将来におけるビアクパンへの「遷都」を控えて、同地に大聖堂の建設を進めている。

ビアクパンに行くと、誰しもそこに小川（おそらくクロスリバーの支流であろう）が流れていることにすぐに気がつく。巡礼者は、周辺の霊力が高まる早朝5時頃、「新しいヨルダン川」と呼ばれるこの小川で3回沐浴し、あるいはその水を持ち帰って飲取塗布する。するといかなる難病も奇蹟的に癒される、と教団内では信じられている。実際、筆者が同地を訪れたときにも、少数ながらも下肢に障害を持つ者などが、癒しの奇蹟を信じて沐浴と

祈禱の生活を送っていた。

癒しについて付言すれば、同胞団では、こうしたビアクパンでの沐浴のほか、一般信者が、水や油に向かい“OOO”という教祖のイニシャルを空中に描くことによってそこに教祖の霊力を注入し、ごく普通の水や油を聖なるものに変容させ、それを用いて病気治療を行なうという独特の宗教行為が広く行なわれている。そしてこれは、例えば既成のキリスト教会の場合、儀礼を行なう権威や霊力が一部の聖職者層に独占されているのに対して、同胞団では、それらが教祖の名によって一般信者に広く付与されていることを物語っている。軍部政権のもとで民主化が目立った進展をみせていない今日のナイジェリアにあって、同胞団という霊的な世界においては、教祖の絶対性を大前提としているとはいえ、現実の政治世界よりもはるかに個人への「民主化」が進行してきたということなのかもしれない。

むすびに

同胞団は、ナイジェリアが独立以来今日にいたるまで実に苦渋に満ちた厳しい政治経済社会状況を経験するなかで、病・貧・争やささまざまな心の問題を抱える人々に有益で魅力的なサービスを提供し、急成長を遂げてきたのである。

とかく新宗教は、不可解、あぶない、いかがわしいといったイメージで捉えられがちである。たしかに新宗教が、さまざまな問題に直面し、困窮するナイジェリアの人々の心理をいわば操作することによって自己増殖を遂げてきたという側面も否めないであろう。しかし逆に、ナイジェリアの人々もまた、新宗教を利用することによって、きれいごとではすまされない厳しい現代社会生活を必死に、あるいは強（したた）かにサバイバルしてきたともいえるのではなからうか。

（おちあい・たけひこ／日本学術振興会）